

南極での建築ノウハウを結集

「センチュリー・プリモア」

ミサワホーム

十二角形の『特異』な高床式

「趣味は走ることと飲むこと。ただ

「持ち込み、室内でひと汗かいてから大好きなビールを飲んでいました」と、ミサワホーム総合研究所南極

研究会で、吉澤さんは在籍する福田真一氏は、今年4月の報告会で、南極での思い出をこう飘々と語る。

福田氏は、第55次日本南極地氷観測隊に参加、2015年12月～2017年3月の約1年半、「極寒の大大陸」で施設建設や建物のメンテナンスに

取り組んだ

「12角形」の基本観測棟完成イメージ



に「極寒と、ひもじい食事に耐えながらの『サバイバル』」というイメージが根強い。だが、冒頭のコメントからも滲む

さて、目下同社は新しい基本観測棟の建設に挑んでいる。いわば、得意とする、「モノコック構造」「工業化」「気密・断熱」の集大成だ。高床式の2階建てで、延べ床面積は約400m²。これまで4つの建物にあつた観測のためのスペースを、1つに集中約することになった基本観測棟、階段を建物中央にレイアウトすること

コック構造を基軸とした工業化技術と断熱技術を居住棟に盛り込むこと半世紀。今では居住空間もすつかり心地よい。福田氏の何気ないコメントが、まさにその証左と言つていいだろう。

今年は昭和基地が開設して60周年としてミサワホームが南極での建築に携わってから50年を迎える節目の年。同隊は当初、艱難辛苦の連続

うに、実際は快適の様子。ただし、そこは南極。冬場の昭和基地周辺は零下45℃にもなるまさに「地獄」だ

で観測隊員の移動がスムーズに。12
角形の外観は日本の南極観測基地
では初で、風速60m／秒というブリ
ザードに耐え、かつ吹き付ける雪
をうまく逃がし、建物が埋まらない

めた住宅、「センチュリー・プリモア」を開発、木質系工業化住宅の最上位ブランド「センチュリー」で、ようやく発売した。同社の創立50周年記念商品でもあり、木質パネルを通

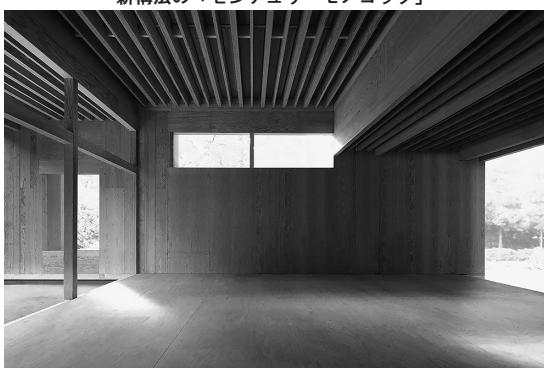
今年創立50周年のミサワホーム。今後も極寒の地をフィールドに、どのような省エネ技術を開発するのか。

楽しみだ。

今回、福田氏はこの基本観測棟の基礎・土台作りを担当、続く第58隊がいよいよ建物の建設に着手し、第59隊に引き継がれ、2018年3月に竣工予定だ。

厚さ120mmの高断熱効果

新構造の「センターユニット／コック」



(画像提供: 三井口走一木株式会社)